

アルフレート・シュッツにおける「意味」

橋爪大輝*¹

キーワード：意味 理解 体験 時間

はじめに

アルフレート・シュッツの主著『社会的世界の有意義的な構造』(*Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt*, 1932)⁽¹⁾の目的は、マックス・ヴェーバーの理解社会学の方法に哲学的な基礎を与え、その営為を哲学的に深化させることにある。

[...] 私たちにとって重要なのは、マックス・ヴェーバーがあらゆる種類の社会的関係と形象、文化的諸対象 Kulturobjektivationen や客観的精神の諸領域を、個々人の社会的振る舞いというもっとも根源的な発生エレメントに帰着させていることである。たしかに社会的世界のあらゆる複合現象はその意味 Sinn を含んでいる。しかしこの意味はまさしく、社会的世界のなかで行為する者がみずからの行為 Handlungen に結びつける verbinden ものなのである。個人の行為とその思念された意味内容 gemeinter Sinngehalt のみが理解可能であり、個別的行为の解釈においてのみ、社会科学は社会的関係や形象の解釈への道を獲得できるのである。(Aufbau: 13-4. 太字追加)

ヴェーバーは、社会現象全般に含まれる「意味」に着目し、しかもその意味とは行為者が行為に「結びつける」ものだと考えた。そしてそうした意味こそが「理解」可能なものである。これが、シュッツの見るヴェーバーの理解社会学の基本的構図である。

「意味」こそが「理解」されうるものである。逆にいえば、「理解」という営みの対象はまずもって「意味」である。それゆえに「意味」は、「理解」を重視する社会哲学的営みの最重要概念となる。

ところが、シュッツは同時に、ヴェーバーが「意味」の哲学的な「意味」を十分に解明できていないと考えている。それは、「多岐に枝分かれし、さらなる穿鑿がぜひとも必要な問題系に与えられた名称」(Aufbau: 15)でしかない。かくてシュッツの課題は、「意味」がなんであり、どこで、どのように生成してくるかを、哲学的な概念装置のなかで明確化すること、ということになる (cf. 佐藤 1981: 4-5)。

しかし、この企てに必要なのは [...] より大きな射程をもつ哲学的な装備である。表層的な分析だけでも、意味問題が時間問題であることを示している。ただし、分割可能で測定可能な物理的な空間的時間 Raumzeit や、いつまでも外的な出来事に満ちた経過であり続ける歴史的時間の時間問題ではない。そうではなくて「内的時間意識」、各人に固有の持続 je eigene Dauer の意識の時間問題である。体験する者にとって、その体験の意味は意識のなかで構成されるのである。反省にのみ接近可能な、この最深の体験層は、厳密に哲学的な自己省察においてのみ開示されう

(所 属)

* 1 山梨県立大学

る。この体験層においてはじめて、「意味」と「理解」という現象の究極の起源は示しうるものなのである。(Aufbau: 20. 太字追加)

シュッツは「意味問題は時間問題である」と主張する。そして、その時間とは物理的な時間ではなく「各人に固有の持続」であるという。その一方で彼は、「体験の意味は意識のなかで構成される」とも説く。一見すると、結びつきのさだかでない術語が論理的跳躍を抱えつつ次々と繰り出されているように見えるこの主張は、いったいなにを意味しているのか。本稿は、この引用に集約的に表現されているシュッツにおける意味生成の論理をたどり、彼が見出した「意味」の哲学的な意味を明らかにすることを目指したい。

まず第1節では、シュッツがベルクソンから引き継ぎ、意識を特徴づけるのに用いる「持続」という概念を明らかにする。シュッツによれば、この持続のなかで体験されるものにはまだ意味は備わっていない。意味はこの体験にたいする〈自我〉の特殊な態度——「配意」とシュッツは呼ぶ——においてはじめて形づくられる。そこで、第2節では、配意において体験がいわば「切り取られ」、意味が生成するプロセスを見る。つぎに第3節では、このような配意における体験の切り取りが、なぜ意味を生成させるかを、体験が切り出されることそのもの、そこにおける時間的な〈相〉の転換、体験どうしの連関づけ、といった三つの点から解き明かす。最後に、第4節において、こうして構造的に解明されたシュッツにおける意味が、言語的なものと親和性が高いことを示す。

1 持続

シュッツは、私たちの意識のなかで意味が生まれてくるという原基的な場面から、意味とはどんなものかを押さえようとしている。それゆえシュッツは、私たちの意識がどのようなあり方をしているのかから、議論を始める。そのさい彼の拠りどころとなっているのは、さしあたりベルクソンの概念装置である。

ベルクソンは、原理的に多様な質の連続的な生成と消滅 *Werden und Entwerden*⁽²⁾ としての内的な持続経過 *Dauerablauf*、すなわち持続 *durée* を、空間化されているがゆえに同質的で非連続的で量化可能な時間に対置する。「純粹持続」のうちにはいかなる相互並列 *Nebeneinander* も相互外在 *Außereinander* も分割可能性も存在しない。あるのはただ、流れ去ることの連続性、意識の諸状態の連続だけである。(Aufbau: 62)

シュッツは、ベルクソンのことばをそのまま借りて、私たちの意識の本質的なありかたを「持続」と呼ぶ。そしてその持続を、「空間化されているがゆえに同質的で非連続的で量化可能な時間」と対置している。後者をいったん輪郭づけてから、前者を逆照射してみたい。

シュッツは、持続のうちには相互並列も相互外在も分割可能性も存在しないと述べている。つまり、これらの特徴は逆に「空間化された時間」のほうにあてはまる。空間においては、そこに存在する基本的要素が一つひとつ独立した単位をなしており、たがいに区別されたものとして共存することができる。たとえば、目のまえに見いだされるリングは、閉じた輪郭のうちであり、その輪郭のなかに完結していて、べつのリングを並置したからといって、たがいに溶け合ってしまうということはない。それらのリングは、たがいに外的であり(たがいにたがいの外にあり)、「非連続的」である。「空

間化された時間」とは、こうした空間的な特徴が「誤って、時間に投影されたとき成り立つものなのである。空間的時間もまた、閉じた輪郭のうちに完結する個的要素が並列することによってなりたっている。だが、この時間の捉え方は、すくなくとも意識の持続を言いあらわすうえで適切ではない。では、持続はどのような与えられ方をしているのだろうか？

実際私は、私の持続の経過に没頭する^{ジッヒ・フェアゼンケン}とき、たがいにくっして境界づけられていない諸体験を目の前に見出す。〈今〉は〈今〉につながり、ある体験は生成し、生成し終える。新しいものがより先なるものから生い育ち、より後なるものに場を譲り消えていくことによって、である。そのさい私は、なにか〈今〉をより先なるものから、またより後なる〈今〉をたったいまあった〈今〉から区別するのかわ、述べることができない。(Aufbau: 64)

持続にあつては、それを構成する「基本要素」が完結した輪郭をもたない。諸体験は、たがいにたいして「境界づけられていない」のである。シュッツは〈今〉が新しい〈今〉につながると述べているが、この〈今〉は輪郭によって切り出すことのできるものではなく、新しい〈今〉に切れ目なく接続している。それゆえ、シュッツは体験が「生成し、生成し終える werden und entwerden」と述べているが、これはある体験が消滅し^滅てから、そのあとべつの新しい体験が発生するという意味ではないだろう。ひとつの体験が消えることがすなわちそのまま新しい体験の発生であるはずである。

たとえば、視界の右側から左側のほうへ鳥が飛んでいくのを見る、という体験を考えてみよう。それは、視野の外れのほうに鳥の影が現われ、右から左へその鳥の姿が移動していく視覚的体験である。その間、鳥の背景は瞬間ごとに変化していく。また、鳥そのものの色合いや陰影、形態、シルエットなども、羽ばたきなどの動きや光源との位置関係の変化などにより、位置を変えるごとに微細な変化を続けるだろう。つまり、この体験は瞬間ごとに新しい位相を示し、変化し続ける。しかも、この体験を構成する一単位である位相は、厳密に一瞬間として取り出すことができない。鳥の翼はある瞬間には上へもちあがり、べつの瞬間には下に降ろされるけれども、その瞬間と瞬間は離散的でばらばらなものではなく、切れ目なくつながっている。この場合、その経験の終端を特定することもできない。なぜなら、一瞬間あとには、新たな要素が（予測しえない形で）出現してくるからである。移動する鳥に突如として建物の影がおち、その表面の色合いが変わるかもしれないし、あるいは突風にあおられて鳥が急に方向を変えるかもしれない。このように体験は、たえず新たな要素が（突発的に）出現してくるかもしれないというオープン・エンドな構造をしているのだ、といえよう。

これは、飛ぶ鳥を見るという体験に限らず、体験がリアルタイムなものであるかぎり、普遍的にあてはまる性格であると思われる。

しかしシュッツは、このような持続のうちには意味は存在しないと考えている。意味は、この持続から「距離を取り」、それに反省的にかかわるときはじめて生まれてくるというのだ。どういうことだろうか。

2 「配意」による意味の生成

意味は持続の体験そのもののなかには存在しえない。なぜだろうか。シュッツはつぎのように説明する。

〔…〕有意味な体験という概念はつねに、意味がそれに述定される体験がしっかりと区別された *wohlunterschieden* 体験であるということを前提するものなので、以下のことは非常に明晰に示される。すなわち、有意味性はある過ぎ去った体験、つまり回顧するまなざし *der rückschauende Blick* に対して完結し生成し終えたものとして提供される体験にのみ、認められるということである。(Aufbau: 69)

前節でみてきたように、持続における体験には、その体験を構成する要素と要素のあいだに境界線がない。それらの体験は切れ目のない連続である。しかし、それにたいして「有意味な体験という概念はつねに」、ある体験が「しっかりと区別された体験であることを前提する」。シュッツのみるところ、有意味な体験とされるものは、意味以前の持続の体験とことなり、その体験の構成要素が完結的で、ある輪郭のうちに画されたものである。そして、こうした完結的な体験は「回顧」するまなざしに対してのみ現われる。シュッツはそれゆえ、意味は「反省」⁽³⁾ もしくは「自己解釈 *Selbstausslegung*」(Aufbau: 16) においてのみ開示されると考えるのである。

ところで、シュッツがヴェーバーの意味概念を不十分とみる理由はいくつかあるが、目下の文脈で重要な点は、「思念された意味」や「行為に意味を結びつける」といったときの「思念」や「結びつけ」という概念の曖昧さである。シュッツが行なおうとしているのは、こういう「思念」とか「結びつけ」といった関係を、概念的に明晰化することであるとも言える。

私がこれら諸体験のうち一つについて、それが有意味 *sinnhaft* であると言明するとき、これはつぎのことを前提している。すなわち、私がその体験を〔…〕諸体験の充実から「際だたせる」ということである。私がその体験に「配意する *zuwenden*」ことによって、際だたせるのである。私たちは、そのようにして際だたせられた体験を「しっかりと境界づけられた *wohlumgrenzt* 体験」と名づけたい。そしてその体験について、私たちはその体験に「意味を結びつける」と言いたい。以上をもって、私たちは意味一般の第一にしてもっとも根源的な概念を獲得した。(Aufbau: 53)

さきほどの引用においては「しっかりと区別された」と言われていたことが「しっかりと境界づけられた」と言われているなどの表現にかわっている点を措くとすれば、語られている内容はさきほどの引用と大きな違いはない。シュッツは、この「配意 *Zuwendung*」において、体験がしっかりと境界づけられ、区別されることを、体験に「意味を結びつける」ということの意味だと述べているのである。

配意によって、いわば体験は「切り取られる」。シュッツはさらに、体験が配意によって有意味化することを「光の円錐によって持続流が照らされる」とも表現している。「〔…〕あの自分の持続へと振り向くことは、いわば光の円錐 *Lichtkugel* に比べることができる。この光の円錐は持続流の経過し終えた個々の位相 *Phase* を照らし出し、そうして境界づける。いまや経過し終えた個々の位相は照明され、私たちはそれらが明るくなったと言うのである」(Aufbau: 94)。配意を、川の流れにスポットライトを当てることになぞらえることもできよう。持続の流れは、前節でみた通りつねに新たな体験の可能性に開かれていて、権利上限界をもたない。しかし、このスポットライトによって、そのなかから一部が切り出され、限界づけられる。シュッツは、ヴェーバーが「意味を結びつける」と比喩的

に述べた作用を、このように捉えなおすのである。

しかし、ここでいくつか疑問が生ずるだろう。①なぜ有意味性が「しっかりと区別された・境界づけられた体験」を前提するのか不明である。シュッツは「前提する」といっているだけで、この主張は一見独断的にとどまっている。②なぜ「しっかりと区別された」体験が、回顧的な配意にのみ与えられるのか。その理由は、いっけんそう思えるほど、分かりやすくはない。③シュッツは「意味を結びつける」というヴェーバーの言い回しを明晰化することをころみているが、「しっかりと区別された体験」「配意」「光の円錐」等の概念系は、いささかも「比喩、や「感覚、の埒を抜け出していないのではないか。④シュッツは、「意味問題」は「時間問題」であると述べていた。持続はたしかに時間論的概念であるが、持続の一部が切り出され、有意味化される事態には時間論的な含意はあるのだろうか。

持続流に「光の円錐」が当たり、体験が切り出されるなかで起きていることは、この比喩が思わせるほどシンプルな事態ではない。複合的な事態が、意味を生成させている。あらかじめ見通しを示すなら、この事態は(1)持続から体験が切り出され、他の体験から区別されるということ、(2)反省によって、体験が「未完了」から「完了」へと転換すること、(3)体験と体験が連関させられ、構造化されること、という三重の契機から成ると、考えられるのである。順を追ってみていこう。

3 意味生成の構造

3.1 体験を〈切り出す〉ことの含意

シュッツにとって、有意味な体験は「しっかりと区別された体験」であり、「しっかりと境界づけられた体験」である。スポットライトで照らし出された枠内の体験が有意味であり、境界線の外部は意味の外として闇のなかに沈む。こうした境界線が引かれることが、すでに意味の生成に与かっているとと思われる。

さきほどの事例を思い返そう。鳥の飛翔を見るとき、飛翔する鳥の様子は一瞬ごとに変化する。ある体験のつぎにはどんな体験が訪れるかがわからない、オープン・エンドな構造をしている。このように概念と言語で論ずるかぎり、実際にはこの体験をありのままに描き出すことはできず、「鳥が視界の右側から左側に飛んでいく、といったように、始まりと終わりを設定して表現するほかなかったが、実際の体験は鳥を見終えたあとも続いていくだろう。さらにいえば開かれている「^{エンド}端」は厳密に言えば「^{エンド}終わり」だけでなく、「始まり」もまたそうである。鳥を見始める以前にも、なんらかの体験はなされていて、原理的にはその体験する自我の生の始まりにまでつらなる系列をなしているはずなのである。

体験を円錐で切り出すことは、このようなオープンで権利的には無際限な系列の両端を切り落とし、一定の体験を完結した「個」として扱うことを可能にする。このことは、体験を他の体験と関係づけること（後述）を可能にするという意味でも体験の有意味化に寄与するが、それ以前に、境界をもたない無際限なものから一定の範囲が有限なものとして切り取られることがそれだけで一定の意味を生成させるともいえないだろうか。無限に広がる空間から、特定の場所を切り出すことは、それだけでも、焦点化し、その場所に〈形〉を与えるという意味で、何らかの有意味性を生成させる。それと同じように、無際限な持続の流れも、そこに切れ目を入れるなら、特定の部分が焦点化されてアクセントがつけられ、すでにミニマムな意味を帯びることになるだろう。

ここで述べた点は、①の疑問「なぜ有意味性が『しっかりと区別された・境界づけられた体験』を

前提するのかわからない」という点への回答の一部にはなる。だがこれだけでは体験が有意義になったというにはまだ不十分だろう。

3.2 「相」の転換

有意義な体験は、しかし、たんに「しっかりと境界づけられ」ているだけではなく、「回顧」において把握されるものでもある。つぎにこの点について考えてみたい。まず考えたいのは、有意義性は体験が回顧されるときにのみ見出されるということは、有意義な体験は総じて過去に属するものなのか、ということである。

シュッツによれば、「配意の作用 *Akt* は [...] 経過し終え *abgelaufen*、生成し終え *entworden*、完遂された *fertig*、要するに過ぎ去った *vergangen* 体験を前提としている」(Aufbau: 68)。この一節に鑑みるなら、体験は回顧において反省されるということは、一見すると、有意義でありうるのは過去の体験のみであるということの意味しているように思われる。たとえば、吉澤夏子は、つぎのように述べている。「『意味ある』体験といわれるのはこの反省のなかで捉えられた体験だけである。反省という作用は過去の体験を前提にしているので、有意義性は過去の体験だけに認められる」(吉澤2002: 30. 傍点付加)。

しかし、その場合、行為——厳密には行為の投企——の有意義性が説明しえなくなる。どういふことか。シュッツによれば、行為をその他の振る舞いから区別するのは、完了した行為の想像が行為のまえにあらかじめ投企されているという点にある。私たちが行為を計画するとき、その行為は必然的に将来に属するものであるが、私たちはその行為を完了したものとして思い描く。たとえば、大学に行くことを計画するとき、〈大学にいる状態〉という行為の完了点をもあわせて思い描かずにはおれない。それゆえシュッツは、こうした行為の計画を逆説的にも「あらかじめ想起すること *Vorerinnerung*」とも呼び表わす。しかし、この「想起」は過去にではなく、未来に向けられている。にもかかわらず、この行為の計画も、回顧された行為と同様、有意義な構造を持っているはずなのである。だとすれば、有意義な体験は、時制においては将来にあってもよい。

それゆえ、シュッツが回顧や反省と呼ぶものの対象は、時制における過去に存するものと見なすことはできない。では、回顧や反省が捉える次元を、私たちはどう捉えるべきだろうか。

ここで私たちは、杉山直樹のベルクソン解釈(杉山2006: 76ff.)を参考に、持続における体験が反省において有意義なものと捉え返されるとき起こっているのは、「未完了」から「完了」への「相」の転換である、と主張したい。杉山によれば、ベルクソンにおいて「未完了」的な持続と対立するのは「完了」である。未完了とは、裏返していえば生成のただなかにあるということである。それゆえ杉山は、未完了を「なる」という動詞によっても特徴づけている。これに対して、完了とは「ある自同的な『今』という時間を有し、そこにおいて『ある』と言われ、しかも自らに同一なものとして『ある』ような、そのような存在様態」(ibid.: 79)である。つまり、未完了と完了の対比とは、生成し変化するあり方と、生成を止め、固定的で同一的な存在となったあり方の対比であるといふことができる。

杉山の解釈するベルクソンによれば、事象をこのような完了相によって取り扱いうることで私たちは「予見」をなしえている。「つまり、『完了した (*accomplis*) 事実系列』としての過去は、完了している限りで、『一挙に表象できるもの (*chose, qu'on peut se représenter tout d'un coup*)』となっているのだが、それと同様に、予見という作業もまた、未来の現象をすでに完了してしまつたと見

做しつつ『一挙』に、つまり生成とは無縁な存在様態において、表象してしまうことをその本質とするわけである。『一挙』に表象可能な『完了した』『もの』として実在を捉える視角がある」(杉山2006: 82)。このように完了相において事象を捉えうるからこそ、たとえば蝕のような天文学的に長時間の出来事を圧縮して取り扱い、机上で一瞬で計算して時期を算定することも可能になるのだ (cf. Bergson 2013[1889]: 146ff.)。

このようにベルクソンに引き戻しつつ解釈することで、②なぜ「しっかりと区別された」体験が、回顧的な配意にのみ与えられるのか、という私たちの問いにも示唆が与えられる。未完了の体験は、生成し続けているために、〈もの〉として、つまり〈個〉として取り扱うことができない。それゆえ、それは「一挙に」、一望のもとに取り扱うことができない。シュッツのいう「しっかりと区別された体験」は、まさにこうした一望のもとに把握できる、〈もの〉的な、〈個〉的なあり方をしていると思われる。しかしこうしたあり方は、未完了の体験を完了へと転化させることによってはじめて得られるのである。

すでに第1節においても取り上げたとおり、ベルクソンはシュッツの理論の源泉のひとつである。このような「相」としての時間理解をシュッツにも適用可能であるとすれば、彼のいう回顧・反省における体験の存在様態についても、「こうした存在様態をそれでも時間的規定によって表すとしたら、そこにあてがうべきは『過去』などの時制であるよりもむしろ『相 (aspect)』、特に『完了相 (aspect d'accomplissement)』であろう」(杉山2006: 79) という言明はあてはまるはずである。そして、これはたんにシュッツがベルクソンの影響下にあるという事実関係だけでなく、事柄に即しても正当化可能であると考えられる。なぜなら、回顧される体験もまた、前項で見た通り、「しっかりと境界づけられた」「個」的な要素であるとされるからである。

ここで、持続を有意味な体験として捉え返すことが、その体験を完了相へと移行させることを含意しているとするならば、④の問いとして挙げた「意味問題」が「時間問題」であることの意味も判然とする。というのも、意味の生成は、まさしく相の転換という時間的現象であるといえるからである。シュッツのいう時間問題は、時制よりも相にかかわる問題であったと解釈することができる⁽⁴⁾。

3.3 意味連関

こうして、私たちは、配意において体験が〈切り出さ〉れることそのもの、またそのさい相が(未完了から完了へ) 転換されることで、意味が生み出されてくることを確認してきた。さらにシュッツは、体験が複数的に関係づけられ、構造化されることに、さらなる意味の契機を見て取っている。この点をつぎに見ていこう。

シュッツは『社会的世界の有意味的な構造』第14節において、そこまでは持続の体験と有意味な体験という対で捉えてきた事象を、あらためて二種類の「連関」の対比として捉えかえしている。いっぽうの連関を、シュッツは「持続の連関」もしくは「各私性 Jemeinigkeit の連関」と呼ぶ。

まったく異他的な諸体験も、じっさい私^の体験である。あらゆる私の体験が、それに先行する体験と後行する体験と結びついているということは、持続 *durée* の本質から生ずる。持続のなかでは、これらの諸体験がすべるような移行において体験される [...]。(Aufbau: 100)

第1節で分析した持続は、見方によっては一種の「連関」と捉えることができる。なぜなら、持続に

において起きているのは、〈今〉のある体験から、つぎなる〈今〉のべつの体験へと、絶えず移行していくことであり、そこでは体験と体験が関係し合っているからである。これらの体験は、おしなべて〈私〉が体験しているという事実一点のみにもとづいて、結びつきあっている（それゆえに「各私性の連関」と呼ばれる⁽⁵⁾）。しかし、持続においては、これらの構成要素である体験を、それだけ独立に取り出すことができない。すでに見たように、持続を構成する要素は輪郭をもたず完結した単位になっていないからである。さらに、この連関はそれを構成する要素だけでなく、その連関全体もまた未完結である。なぜなら、持続は絶えず変化し、その終端は開かれたままであるからである。

シュッツは、このような「持続の連関」にたいし、別種の連関を対比する。それが「意味連関 Sinnzusammenhang」に他ならない。

私たちは、複定立的に構築される諸作用と、それをつうじて構成される高次の秩序の総合との関係を、意味連関として印づけたい。そしてこの概念を、以下のように正確に定義したい。すなわち、私たちは、私たちの有意義な諸体験 $E_1, E_2 \dots E_n$ について、つぎのように言う。それらの体験が有意義な連関になるのは、これらの体験が、複定立的に分節化された諸作用において一箇の高次の秩序の総合へと構成され、私たちがそれらの体験を単定立的な視線 *Blickstrahl* において、構成された統一性としてまなざすことができるときである、と。 (Aufbau: 101)

シュッツはここで、複数の体験 ($E_1, E_2 \dots E_n$) が、①複定立的 polythetisch に分節化されつつも、それが高次の秩序において総合されており、②それらは統一されたものとして単定立的 monothetisch な視線のうちで捉えることができる、と述べている⁽⁶⁾。そして、この①・②両方をつうじて、体験は「有意義な連関」となる、というのである。

この「単定立的」と「複定立的」とは、それぞれどのような意味をもち、どのような区別であるのだろうか。高艸賢によれば、「〔「複定立的構築」は〕体験の流れの中で有意味的体験が一步一步構築されてくることを指している。例えばグラスに水を注ぐという行為は、ボトルを開け、ボトルを傾けて水を少しずつ注ぎ、一杯になったところでボトルを垂直に戻して注ぐのを止める、という一連の過程によって遂行される。この過程において行為者は、水を注ぐという一連の有意味的体験を順次構築しているのである。他方、この一連の体験経過を『水を注ぐ行為』というひとまとまりのものとして捉える際の作用をシュッツは『単定立的』(monothetisch) と呼び、複定立的 (polythetisch) な作用と区別している。／単定立と複定立は、行為の主観的意味を進行中の過程の観点から表現したものか、すでに終わったものとして表現したものか、の違いに対応する」(高艸2017: 61. 文献情報を省略)。つまり、私たちの理解が正しければ、複定立的とは、持続もしくは各私性の連関が徐々に成立してくることを特徴づけるものであり、たいして単定立的とは、そうした徐々に成立してきた体験を回顧的かつ一括的にとらえ有意味化した、完了相の体験を特徴づけるものであると、高艸は解釈している。

たしかに、シュッツには高艸の解釈と整合的にみえる箇所もある⁽⁷⁾。しかし、この解釈に従うと、「複定立的」ということばは、反省において捉えられる体験よりも、むしろ持続という現在進行形の体験のほうに当てはまることになってしまう。だがシュッツによれば、「あらゆる体験（より正確には、ego cogitans としての私がそのなかに生きるあらゆる作用）の各私性の構成と、より高次の秩序の総合へとそれを複定立的に構成することとは、厳密に区別されねばならない」(Aufbau: 101)。そ

れゆえ、複定立的を現在進行形（未完了相）の体験に、単定立的を完了相の体験にそれぞれあてがうのは、的確でないように思われる。

むしろ、シュッツは単定立的と複定立的をそのような選言的な態度のちがいというよりも、体験を有意味化するなかで、その有意味性に不可欠なたちで組み込まれるふたつの契機とみているように思われる。想起するならば、シュッツは「それらの体験が有意味な連関になるのは、これらの体験が、複定立的に分節化された諸作用において一箇の高次の秩序の総合へと構成され、私たちがそれらの体験を単定立的な視線において、構成された統一性としてまなざすことができるときである」（Aufbau: 101. 既出、強調を省略）と述べていた。単定立性も複定立性も、ともに有意味性の構成要件をなしているように見えるのである。したがって、つぎのように解釈すべきであろう。

複定立的とは、有意味な連関の内部では、その連関を構成する個々の要素が、個体的・単位的に独立しながら複数存在していることを意味している。個々が完結した閉じた複数の個体が結びついていることが、シュッツのいう「複定立的に分節化され」ているということの謂いである。これに対し持続の連関にあっては、諸要素が「すべるように移行」するのだった。一つひとつの要素を単位としてそれ自体取り出すことはできない。したがって、本来は「要素」という言い方すら便宜的にのみ許されるというべきであろう。

さらに、有意味な連関においては、同時にそれを構成する複数の要素が「単定立的」にも捉えられる。複数の要素から成る（複定立的な）意味連関を「総体、として、ひとつのものとして捉えることを、「単定立的」ということばは意味していよう⁽⁸⁾。この点も持続の連関とはことなる。絶えず新たな要素が入ってくるこの連関においては、ある部分を終点として、一定の範囲を一箇の「全体、として取り出すことができない。持続の連関はオープン・エンドであらざるを得ない。

この点を、ふたたび〈鳥の飛翔〉の体験という具体例に即して解釈してみよう。この体験は、たとえば「その鳥は右のほうから飛んできて、木々のうえを通り過ぎ、左のほうの建物の影に消えていった」というように記述できるだろう。この記述は、〈右側からの出現〉、〈木々の上の通過〉、〈左側への退去〉という三つの個別的要素が結びあわされた連関であるといえる。そして、この連関は〈鳥の飛翔〉という高階の統一性においてまとめうる、閉じた「全体、と見ることができる。

ある一定の全体を切り出し、その内部で複数の独立的な要素を分節化することなしには、事態を言語的に記述することはできない。記述はかならずなんらかの始まりをもち、なんらかの終わりをもち、そのような記述は伸び縮みすることもありうるが、複数の要素からなる全体という構造を失うことはない。たとえば、〈私は公園を散歩していた〉・〈ふと鳥が飛ぶのが見えた〉・〈私はそのあと帰路についた〉という別の記述のなかに、さきほどの体験が組み込まれる可能性もあるが、それは全体が拡張され（るとともに〈鳥の飛翔〉の体験が圧縮され）たということに過ぎない。シュッツ的にいえば、この記述は依然として「複定立的」な体験が「単定立的」に「総合」されるという構造をもっているのである⁽⁹⁾。

シュッツは、このような連関を意味の構成要素のひとつと捉えていたのだ。

このように意味連関を、複数の要素を高階の要素で秩序化した統一体と考え、また意味がそうした連関においてのみ成立すると捉えることで、第2節末尾の疑問が、さらにいくつか解決する。

③の、シュッツの意味概念はヴェーバーにおとらず比喩的ではないか、という疑念についてだが、シュッツは、配意によって体験に「意味を結びつける」ことを、本節が示したようなしかたで体験を構造化することとして概念的に明確に捉え直している。そのことで、たんなる比喩の埒は脱したと言

えよう。

そして、①なぜ有意味性は「しっかりと区別された体験」を前提するのか、という疑問にたいしても、相の転換において体験が個的に取り出しうるという点に加えて、シュッツが有意味性を如上の構造として捉えているためである、と回答することもできるだろう。なぜなら、こうした階層化された複数要素の閉じた構造は、オープン・エンドな体験については構成しえないように思われるからである。

以上でシュッツにおける意味概念を、持続の概念との対比において際だたせつつ理解しおえたことになる。意味を構成する契機をここでいちどまとめるならば、(1)オープン・エンドで無際限な体験が「切り出さ」れ、一定の限界を与えられること、(2)未完了的な体験が回顧において完了したものへと転換されること、すなわち相の転換がなされること、(3)体験が、単定立的な視線という高位の次元によって一括される、複定立的な諸体験として分節化されていること、となる。この三重の契機によって、有意味な体験の有意味性は成立するのだといえよう。

4 意味と言語

こうして、シュッツにおける意味概念の解釈は果たされた。最後に、こうして取り出された体験の意味と、言語との関係について小考してみたい。

通常、意味といえば言語的だと考えられるだろう。しかしこうした通念に反して、シュッツはつぎのようにいう。「意味とはむしろ […] 自分の体験に対する特定の視線の向け方を印づけるもの *Bezeichnung* である […]」(Aufbau: 54)。意味とは持続に対する視線の向け方であって、かならずしも言語化される必要はない。言語はこうした視線の向け方を実体化する、つまり事物的にしてしまうものなのである。「困難はとりわけ言語のうちに存する。言語は、深い理由から、一定の仕方でもなごしのうちにもたらされた諸体験を態度として実体化し、そのうえ視線を向けることそのもの——それがそのような体験一般を態度にする——を、意味としてまさしくこの態度に述語づける」(Aufbau: 54)。意味とは、言語によって実体化された、私たちの「視線の向け方」なのである。

しかし、ここでシュッツが依拠しているベルクソンの持続／空間の区別に立ち返るならば、前節で見たとおりシュッツのいう意味は完了的であり、空間的である⁽¹⁰⁾。ベルクソンによれば、個々の要素がはっきりと輪郭をもち区別される空間的なものは、言語的でもある。「私たちが自らを表現するのは必然的にことばによってであり、私たちはたいてい空間のなかで思考する。いいかえれば、物質の対象のあいだにあるのと同じ明白で厳密な区別、同じ非連続性を、観念のあいだに打ち建てることを、言語は要求するのである」(Bergson 2013 [1889]: VII)。ベルクソンがいうように、未完了の体験を完了的に転換するとき、その体験が言語に通底するあり方を獲得するのだとすれば、シュッツにおける意味も避けがたく言語的な次元に属することになるだろう⁽¹¹⁾。シュッツの言明も、このことを踏まえて読み返してみるならば、両義的であることが見えてくる。「体験に意味を述定する言語形式はミスリーディングである。その形式が、たとえどれほど深く反省の本質に根ざしているとしても」(Aufbau: 93f.)。なるほど、言語形式は「ミスリーディング」である。しかし、有意味な体験に言語という形式が適用されるのは、「反省の本質」に根ざしているのである。この場合の反省とは、体験を完了的にとらえる回顧に他ならない。

たしかに、私たちが回顧するさい、体験はかならずしも言語化されているわけではなく、たとえば映像的に、あるいは音声的に想起される場合もあるだろう。しかし、そのような場合も、言語的な秩

序をそなえた形で体験は想起されるのではないだろうか。現代風の比喩を用いるなら、体験はいわば「チャプター」や「トラック」に区分され、「タグ」のようなものによってある程度整理され、参照可能なものとして、再生されるといえるだろう。体験をそのように取り扱いうるのは、体験の有意味化において、体験に言語的なあり方が与えられるからだといえよう。

おわりに

本稿では、シュッツにおける意味の概念を解釈してきた。

ヴェーバーの意味概念が哲学的な基礎をもたないと考えたシュッツは、意識における意味の生成を捉えようとした。意識は持続というあり方をしているが、この持続においてはその構成要素である体験は輪郭をもたず、次から次へと絶えず移行している。こうした持続における諸体験に対する配意により、その体験に意味を「結びつける」ことができるとシュッツは主張する。この「意味を結びつける」という比喩は、シュッツにおいて、三重の契機によって概念的に説明することができる。すなわち、(1)体験の〈切り出し〉、(2)完了相への転換、(3)単定立的な高位の秩序のもとでの複定立的な分節化、である。このように構造化された体験こそ、有意味な体験なのである。

本稿で解釈した意味概念は、有意味な行為の有意味性や、他者の（行為の有意味性の）理解といったシュッツ哲学の問題全体への入り口である。とはいえもはや紙幅は尽きた。そうした問題群の分析は今後の課題として見すえたいうえで、稿を閉じたいと思う。

文献

- Bergson, Henri. 2013[1889]. *Éssai sur les données immédiates de la conscience*. 10e éd. Éd. critique dirigée par F. Worms. PUF, coll. « Quadrige ».
- Husserl, Edmund. 2009[1913]. *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, erstes Buch*. Philosophische Bibliothek, Meiner. (渡辺二郎訳『イデーニ I - II』みすず書房、1984年。)
- Schütz, Alfred. 1974. *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt: Eine Einleitung in die verstehende Soziologie*. Suhrkamp [orig.1932]. (= Aufbau)
- Srubar, Ilija. 1988. *Kosmion: Die Genese der pragmatischen Lebenswelttheorie von Alfred Schütz und ihr anthropologischer Hintergrund*. Suhrkamp.
- 佐藤嘉一1981「自己理解と他者理解——A・シュッツの『社会的世界の意味構成』をめぐって」『社会学評論』32巻3号、日本社会学会、2-17頁。
- 杉山直樹2006『ベルクソン 聴診する経験論』創文社。
- 高艸賢2017「シュッツの社会科学基礎論における生の諸相——体験次元と意味次元の統一としての主観的意味」『現代社会学理論研究』第11号、55-67頁。
- 谷徹1994「単一光線的／多光線的」『現象学事典』弘文堂、316-7頁。
- 廣松渉1991『現象学的社会学の祖型——A・シュッツ研究ノート』青土社。
- 吉澤夏子2002『世界の儂さの社会学——シュッツからルーマンへ』勁草書房。

注

- (1) 以下、本書からの引用は、Aufbau という記号にページ数を付すかたちで本文中に直接表記して示す。本書からの引用はすべて筆者の試訳である。
- (2) “entwerden” の語は「消滅する」と「生成し終える」の二通りに訳し分けた。entwerden が werden と対比されて用いられるさい、その対比には二つの方向があると思われる。ひとつは、「無から有へ」という方向の生成に対して、「有から無へ」という逆方向の生成、(すなわち「消滅」という対比。もうひとつは、「生成しはじめ、まさに生成のさなかである」という意味での werden に対して、「生成を終えて、生成を脱した」という意味の *ent*-werden という対比。シュッツはこうした違いにそれほど意識的ではないかにも見えるが、本稿ではこの意味の違いをいちおう意識して訳し分けた。
- (3) 「この持続流そのものの把握さえも、すでに持続の流れに対する振り返り *Rückwendung* を前提している。それは、自分の持続の経過に対する特殊な態度であり、私たちはそれを『反省』と名づけたいと思う」(Aufbau: 64)。
- (4) 相、つまり未完了と完了というアスペクトは、ドイツ語においてはフランス語に比べて意識しづらい面がある。たしかにドイツ語にも完了相は存在するが、未完了という相が文法的に明確に位置づけづらいし、また現代ドイツ語では完了形がほとんど過去形として使われているという事情もある。
- (5) 「むしろ、各私性の連関において構成されるのは、あらゆる思惟 *Cogitationes* の帰着点としての〈私〉〔自我〕だけである」(Aufbau: 101)。
- (6) 「単定立的・複定立的」という表現の典拠はフッサール『イデー I』だが、廣松(1991: 123)が指摘する通り「シュッツがこの個所で鍵概念として頻用しているフッサール用語は、フッサール本人においては必ずしも中核的な主要概念ではないということ、このことに留意を要する。因みに、シュッツにおいては極めて重要な『複定立的作用』『単定立的作用』における連続的综合、連関態の構成という議論のごときは、フッサールの場合、着眼はあっても展開されてはおらず、これは殆どシュッツのオリジナルなのである」。この概念については、谷(1994)も参照。
- (7) 「この体験への反省的配意は二つの仕方では生起しうる。すなわち、〔一〕連続的な段階のなかで生成したもの(行為・ふるまい)を、複定立的な視線 *Blickstrahl* において追体験する『再構成』として、あるいは〔二〕段階的に遂行された行為(ふるまい)を通じておのれを与えるに至ったもの、つまり所為〔*Handlung*: 完了相における行為〕あるいは〈ふるまったこと〉*Sich-Verhalten-haben* へと、単定立的に振り向くこととして、である」(Aufbau 95)。
- (8) 「複定立的な構築において産出された高次の秩序の総合には、総じて、一箇の全体的対象が対応している。ひとつの光線のまなざしにおいてはこの全体的対象が見られて *hingesehen* いる。これにたいして、各私性の連関はちがった種類のものである。というのも、端的に連続する *in ihrer schlichten Abfolge* 異他的な諸体験は、じっさい、ひとつの光線において見られる一箇の高次の秩序の総合へと構成されることがないからだ」(Aufbau: 101)。
- (9) 私たちの「単定立」性と「複定立」性の解釈は、フッサールに立ち返ることで正当化できるかもしれない。フッサールは『イデー I』第118・119節でこの区別に触れている。彼は「連続的综合」と「分節化された総合」を対比する。前者は、空間事物性を構成する意識に本質的に属するものであり、他方後者は、「非連続的に断絶させられた諸作用が、互いに結合して、一つの分節

化された統一になる […] つまり、高次の段階秩序の一つの総合的作用という統一になる […]」
 (Husserl 2009 [1913]: 274. 邦訳217頁) ような総合である。複定立的といわれるのは後者の総合であり、こちらは非連続的な要素の総合なのだ (つまり、持続のような連続的な総合ではない)。他方、単定立的とは、このような分節化された総合を、単一の「光線」において意識する作用について用いられている (ibid.: 275f. 邦訳220頁)。

(10) スルバルの見方は、私たちと対立する。彼によると、シュッツは、ベルクソンの空間 - 持続論が存在論的に架橋困難な二元性を構成してしまうことを問題視する一方で、フッサールにおいては非反省的な体験と反省の差異を「態度」の違いとして説明できることを評価する。フッサールの「配意は […] ベルクソンの空間化と等置されるべきでない。配意はむしろ志向的作用の性格を帯びている」(Srubar 1988: 105-6)。

(11) それに対応するようにして、持続は感性的な要素が優位である、といってもよいように思われる。たとえばシュッツは、持続における体験をつぎのように特徴づけている。「〈私〉は、持続の各瞬間において、その身体の状態やその諸感覚 Empfindungen、その諸知覚、態度を取る作用、心の諸状態の意識を所有している。これらの構成要素のすべては、〈私〉がそのなかに生きる、そのつどの〈今〉の〈そのように〉を構成する」(Aufbau: 53)。ここでシュッツが挙げる持続の構成要素は、総じて非 - 概念的な、`感じられる、ものである。さらに、持続における体験について、「しかし、諸状態についての言説は〔流れ去る体験には〕非適合的であり、[…] 空間時間的な世界の諸現象に関連している」(Aufbau: 62) とも述べる。

The “Meaning” in the Theory of Alfred Schütz

Taiki Hashizume ^{*1}

Abstract

Alfred Schütz, a social philosopher as well as a sociologist, attempts philosophical elaboration and foundation of Max Weber’s *verstehende Soziologie* – interpretive sociology. He considers “meaning” as its central concept and tries to clarify how meanings are generated within our consciousness. According to him, our consciousness is essentially duration. When reflection and “turning-towards” is oriented to this duration, it makes seamless experiences of consciousness articulated and discrete. This paper clarifies that meaning is generated because when reflection is performed (1) our experiences are “cut off” from other experiences, (2) reflection makes our “imperfect” experiences “perfect” in terms of aspect, and (3) articulated experiences are mutually connected in a higher order.

Key Words:

meaning, understanding, experience, time

(Affiliation)

* 1 Yamanashi Prefectural University